

人間探求の方法と複数のリアリティ

——カウンセリングとケース研究の知の倫理——

水野 修次郎

目次

はじめに

- 一 カウンセリングのパラダイム
 - (一) カウンセリングの人間モデル
 - (二) カウンセリング研究のパラダイム
- 二 ケース研究とは何か
 - (一) ケース研究デザインをする条件
 - (二) 単一ケースか複数ケース研究か
 - (三) ケース研究の特色
 - (四) どのようなケース研究が存在するか
 - (五) ケース研究によってどのような知識を得られるか
 - (六) ケース研究の妥当性と信頼性

結論

はじめに

本稿は、カウンセリングの学問としての特色を論じ、その知の本質を論じます。さらに、カウンセリング研究と密接な関係にあるケース研究方法を論じ、ケース研究することによって、複数のリアリティの中に存在する人間を知ろうと探求する方法と、その方法によって何が理解できるかを論じます。

一 カウンセリングのパラダイム

カウンセリングのパラダイムは、新旧が共存した状態で複数存在します。カウンセリングを専門とする人は、何らかのパラダイムに従って、概念形成をする傾向があります。それぞれのパラダイムは、人間性についてそれぞれ特色ある考え方をします。また、行動や人格変容について、それぞれの特色ある概念を所有します。各パラダイムには、次のような特色があります。

- ① 精神分析理論パラダイムでは、人間性を悪と考えます。その中心となるテーマは、無意識や生物的な衝動です。
- ② 行動理論パラダイムでは、人間性を中間的なものとして善でも悪でもないという考え方をします。中心的なテーマは、人間行動の環境による条件付けです。
- ③ 人間性心理学パラダイムでは、人間性を善と見なし、人間には変化する意志があると考えます。
- ④ 認知論パラダイムでは、人間性の特質を固定しないで、中間から善なるものという幅がある見方をします。人間は、理性という制限の中で、無限に変容できる可能性があると考えます。

Kuhn (一九七〇)は、科学は「革命を経て、あるパラダイムから別のパラダイムへと連続的に移行する」(p. 12)と述べています。つまり、パラダイムの移行は、突然に起きるといいます。また、新しいパラダイムに移行すると、視点が変化するために新しいリアリティが出現することになります。従って、それぞれのパラダイムは、それぞれの考え方を押し付け、それぞれに従った概念を受け入れるように求めてきます。

科学のパラダイムというKuhnの考え方は、カウンセラーの意識を高める上に大変役立ちます。カウンセラーは、一般的には自己の信じるパラダイムに準拠して、特定な問題解決情況にアプローチします。カウンセラーは、それぞれのパラダイムに埋め込まれている一連の仮説を、特別な場合を除いて、意識することは少ないようです。それで、カウンセラーの奉じているパラダイムによって、提示されるリアリティが違うことになります。

Borgen (一九九二)は、一九八〇年代に入ってから、カウンセリングのパラダイムは、構成主義理論に向かって移動していると述べました。構成主義の視点からすると、リアリティは「内側から外に向かって」構成され、人間の活動(思考)がリアリティを創造し、解釈することになります。このパラダイムでは、人間は考え、積極的に活動する行為者です。従って、カウンセラーは、クライアントがどのような仕方で問題解決アプローチをした要求があるかを、知らなければいけないこととなります。

そのために、単一なパラダイムによるカウンセリングではなくて、クライアントによって異なるパラダイム、すなわち複数パラダイムによるカウンセリングが必要になります。複数のパラダイムによるカウンセリングは、別名を折衷主義(eclecticism)といい、クライアントの欲求を認める立場をとります。折衷主義は、カウンセラーが、複数のカウンセリングアプローチがあることを理解し、それぞれのアプローチの特色を知って始めて可能になります。また、その複数のカウンセリングパラダイムを束ねるものは、カウンセラー自身の人間性です。

このことをKelly (一九九四)は、カウンセリングの二つの力として説明しています。カウンセリングの基礎学問としての人間の発達学や教育学には、人間性の熱情を感じさせる側面があります。もう一つの側面は、技術面です。カウンセリングの技術的・科学的な側面です。この技術・科学的側面を無視したカウンセリングは、訓練や教育を受けていないカウンセリングになる傾向があります。このような事態を避けるためには、カウンセラーが心理

的に成熟することや、人間性を成長させること、カウンセリング技術を向上させること、を統合する必要があります。

(一) カウンセリングの人間モデル

カウンセリングにおける人間モデルも複数存在します。

・フロイド理論では、決定論的な人間モデルを提示します。この理論では、人間は六歳を過ぎるとあまり大きな変化は期待できません。変化は、過去の経験を再体験するか、あるいはやり直す以外にはもたらすことはできません。

・行動モデルは、学習モデルを提供します。人間は、毎日の生活の中で、新しい技術を獲得することによって変化することができます。

・システムモデルによると、人間は生活する環境によって、大きく影響されるとします。変化は、所属するシステムを変えることによってもたらすことができます。

・自己実現モデルは、人間はどのように行動するかを選択することによって、高度な個人の成長を達成することが可能だと主張します。

一九八〇年代になると、新しい理論（情報処理、構成主義理論など）が出現しました。これらの理論は、すでに存在する理論、精神分析、行動理論、実存理論、人間理論に共通する基盤は何かを追求し、統合する力となりました。Mahoney・Patterson（一九九二）は、新しい理論を「諸々の理論を統合に向かわせる」理論と呼び、人間の成長に関して、以下の四点の共通理解を得たとしました。

- ① 価値、リアリティ、力、アイデンティティ等々に対する個人の信条を変化させることは困難。
- ② 情動は知覚に大きな影響を与える。
- ③ すべての学習に新しい経験が重要。
- ④ 安全で親しみのある環境が変化を促進。

新しい理論は、コンテクストの重要性、カウンセラーとクライアントの相互インタラクション、個人は活動的で意思を持つ主体、という共通の認識をしたこととなります。

カウンセリングの人間モデルには、上記の理論を基礎としたモデル以外に、大きく二つのモデルに分類されます。それは、「医学モデル」と「成長・ウェルネスモデル」です。医学モデルは、人間モデルを医学上の問題と関連した概念で説明しようとしています。それで、人間の問題は、異常や不適応の症状として発現するとします。このモデルは、個人の成長を診断するという大きな役割を担います。さらに、医学モデルは、成長段階の「ある」時点、「ある」場所、というようないわゆる静止の状態での問題解決方法を提示します。

ところが、成長・ウェルネスモデルでは、個人の生涯にわたる成長を継続的に測定して、個人と環境システムとの適合を計っていきます。また、成長・ウェルネスモデルは、カウンセリングの医療上の側面を除外するわけではありませんが、トラウマや危機は人間の成長の一部であるとして受け入れて対応します。

実際に介入する場合は、このことが明確になります。医療モデルでは、個人にのみ、介入や治療が施されませんが、成長・ウェルネスモデルでは、個人と環境のレベルで介入が行われます。この両者のモデルは、お互いに補い合う関係にあります。

(二) カウンセリング研究のパラダイム

Hoshamand (一九八九)によれば、最近のカウンセリングの研究パラダイムは、人間の主体的な行動に焦点を合わせる傾向が出てきました。従って、ホリスティックな人間(行動、情動、認知が統合されたもの)や、複数のリアリティに存在する人間を研究対象にするようになりました。

実際のカウンセリングでは、クライアントの役割、カウンセラーの役割、両者のカウンセリング関係がそれぞれ重要です。それで、カウンセラーのパーソナリティ、クライアントの動機、両者の治療関係などが研究の対象となります。ところが、実際の研究では、研究者の抱いている仮説が、研究に影響を与えます。Hoshamandは、人間研究にはコンテキストが大切なのかかわらず、実際には、リアリティは理論によって導かれていると指摘しました。

カウンセラーは、複数リアリティの世界に存在しています。その複数のリアリティ世界の中で、カウンセラーもクライアントも主体的な人間としてお互いに影響を与えます。

ところが、理論によって導かれたリアリティは、リアリティのいわば近似値です。理論は、技術的にリアリティを導き、しかも、リアリティに取って代わるといふ現象さえ起こすことが可能なのです。

カウンセラーは、理論によって導かれた知と実際の経験によって生まれた知との違いを意識する必要性があります。理論に導かれた知は、人間の生活現象をコンテキストから分離し、因果関係が直線的に関連したりリアリティとして把握する傾向が生まれ、単純化し過ぎるために、豊かなコンテキストの意味を失うこととなります。従っ

て、カウンセリングの研究は、演繹・実証研究から経験的で実際的な研究へと向かう必要があります。つまり、カウンセリングは、単一なりリアリティを求めるといふ傾向から、複数のリアリティを求める研究への移行を提唱するものです。

その意味では、カウンセリング研究方法として、ケース研究がいかに適切であるか以下に論じます。ケース研究は、人間活動の豊かなコンテキストを失わないで、複数のリアリティで発生する現象を記述することができる研究方法です。

二 ケース研究とは何か

(一) ケース研究デザインをする条件

Kub(一九八四)は、ケース研究方法を採用する際に次ぎの三つの条件を考慮する必要があるとしました(p.1)。

- ① どのような設問をするか。
- ② 実際の行動をどの程度、コントロールできるか。
- ③ 過去の出来事というよりは、現在進行中の出来事に焦点があるか。

第一に、ケース研究は、“how”、“why”の質問のように、何かを探求する質問や深い意味合いの記述(in-depth descriptive)をするのに適しています。設問の例としては、「この現象は、どのように発生するか」「この現象を発生するケースもあれば、そうではないケースもある。その理由は何か」などが考えられます。

第二に、ケース研究デザインは、実際の人間行動に、実験研究とは違い、ほとんどコントロールを加えられない場合や、観察される現象をコンテキストから分離することが不可能な場合に最適です。統計による分析は、デー

タ分析によって現象の実態が把握できますが、統計の知は文脈の中での豊かな意味合いを失っています。ケース研究デザインは、自然の状態、実際のコンテキストで展開する現象のプロセスを記述できるという特色があります。

第三に、ケース研究は現在進行中の現象を研究できる特色があります。コンテキストから現象を分離するのが不可能な実際の生活を調査することができます。研究者が、現在進行中の現象をホリスティックな視点から濃密に記述したい場合には、適した研究方法といえるでしょう。歴史研究法は、過去の事実の直接参加者・証人による記述（一次資料）や間接的に得た記録を記述した二次資料を活用しますが、ケース研究は、それに付け加えて、インタビューや観察方法を活用します。

Merriam（一九八八）は、ケース研究の第四の条件として、「制限されたシステム (bounded system)」に焦点を当てる必要があると指摘しました。この場合の「制限されたシステム」は、ケースとも呼べます。ケースは、どのような研究の問いがたてられたかによって決定されます。

ケースは、個人の場合もあるし、集団、社会、プログラム、制度、出来事、あるいは概念さえケースになり得ます。ケースが選ばれた理由は、研究者が結論として、そのケースについて、さらに大きなコンテキストに関連した何かを述べたいからです。ケース研究は、ケースについてのある時点での深い意味合いの記述、あるいは時間の経過に伴って展開するケースについての記述を可能にします。

従って、ケース研究を研究方法として選ぶ場合には、以上述べた、四条件を満たすかどうかの検討が欠かせません。

(二) 単一ケースか複数ケース研究か

単一ケース研究は、「ホリスティック(単一単位)研究」と「埋め込まれたケースの研究 (embedded case study)」のような複数単位を分析する研究があります。ホリスティックで単一ケース研究は、ひとつのケースを全体的な観点からホリスティックな記述や描写をすることを目的にします。また、埋め込まれたケース研究によっては、ひとつのケースだけでなく、複数ケースにも当てはまる法則性や洞察を得ることが可能になります。

Yin（一九八四）は、埋め込まれたケースを、複数ケース研究と区別しました。というのは、埋め込まれたケース研究は、ケース全体の性質を問題としますが、複数のケース研究は複数ケースの分析が主題となります。

「埋め込まれたケース」は、ひとつのケースを研究することによってそのケース以外の何かを理解する道具・媒介となるので、インストルメンタル・ケース研究 (instrumental case study) と呼ばれることもあります (Stake, 1994)。従って、ケースは深い意味合いの記述やコンテキストの探求だけではなくて、客観的な事実を知ることにも興味があります。

複数のケース研究は、多くのケースを研究することによって、より正確で豊かな知識を得ることができる場合に実施されます。Yin（一九八四）によれば、それぞれのケースを選ぶ時は、

a 同じ結果が出ると予測される場合 (実質的な反復研究)

b 対照的な結果、あるいは実用的な利益がある場合 (理論的な反復研究)

によって異なるので、目的に応じて慎重に選ぶ必要があります。

ケース研究は、同じ研究方法によって同じようなケース研究をしても、必ずしも同じ結果が得られるとは限りません。ケース研究の特色は、ひとつの状況を詳細に研究して、深い意味合いのある「特定の一貫する鮮明な情

況)を描写することにあります。どのケースを選ぶかは、研究者が研究目的とする現象が「集合」するケースを見つけることが、よいサンプルを選んだこととなります。

サンプルを選ぶ方法は、確率的でない方法、つまり研究者が意図的に、研究する特質や問題が特に顕著に表れている、場所、時間、人、出来事などを選びます。この際の研究者の興味は、事実の確率性や、他への応用や一般化ではなくて、一体何が起きて、その現象の意味合いとは何か、何がいろいろな現象を結び付けているのかを発見することです。従って、サンプルは、統計や確率によらないで、何らかの意図・目的、あるいは基準に照らして選ばれます。

(三) ケース研究の特色

Merriman (一九八八)は、ケース研究の特色を、特殊的、描写的、帰納的、発見的としました。普遍性よりは、特殊性に価値を見出すことによって、特定な出来事、情況、現象に焦点を合わせます。Stake (一九九四)は、ケースには次の六つの特殊性があると述べています(p.238)。

- ① ケースの特質
- ② ケースの歴史的背景
- ③ 物質的・身体的な環境
- ④ その他の環境(経済、政治、法律とう)
- ⑤ 当該ケースとの違いを認識させる他のケース
- ⑥ 当該ケースの情報提供者

ケース研究の目的は、豊富な、濃密な描写によって現象を自然な形で再生し、ホリスティックに、生態のままに、探求的に、実地的に描写することです。従って、情況の複雑さ、コンテクスト、問題発生理由、情況の背景を描き出すことができます。ケース研究の利点は、研究方法が複数に存在することです。インタビュー、観察、複数の視点を統合する文献などが材料になります。さらに、研究対象のケースが、どのようなプロセスで成長したかを描写することができます。

ケース研究の読者は、人間の経験は、複数のリアリティから成り立つことを共感的に理解できます。また、この共感的理解によって、特定な情況におけるケースを他人の気持ちになって体験することを可能にします。

(四) どのようなケース研究が存在するか

a 民族学的なケース研究

民族学的なケース研究は、社会単位や社会現象を社会・文化側面から分析することに特色があります。この研究の特色は、ある集団が共通に抱く信念、風習、伝承知識、工芸品、行為を読者のために再構築することです(LeCompte and Preissle, 1993)。民族学的研究には、解釈的、自然で、ホリスティックで、経験主義的な特色があります。研究方法としては、研究者による参加、観察、インタビュー、資料の分析などを行ないます。

b 心理学的なケース研究

心理学のケース研究は、個人に焦点を当て、人間行動の特定な側面を研究します。Runyan (一九八二)はケ

ス研究を「個人の生命についての情報をシステマティックに提示することによって、複数の個人生命を分析する議論を導く」(p.443)と定義しています。フロイト(Sigmund Freud)は「ケース研究方法によって、精神分析理論を構築しました。ケース研究によって、精神生活の因果律を発見したと主張したのです。このように心理学的なケース研究は、単一ケースで発見された事実から一般的な因果関係を推測し、仮説を提示する場合があります。しかし、ケース研究は、本質的にはコントロールされた研究ではないので、ケース研究によって提示された仮説や一般法則は、厳しい批判にさらされています。

心理学のケース研究は、仮説の提供だけではなくて、特殊なケースを記述する場合にも使われます。臨床ケース研究によって、特定な臨床状況を詳細に記述し、実際のな行動を要する病理を明らかにすることができます。

c 社会学的なケース研究

社会学的なケース研究は、社会構成や、その社会に住む個人の社会化に焦点を合わせます。主要な研究目的は、人口動態や人口構成、社会生活、個人の役割、社会問題を記述することにあります。Hamel(一九九三)は、社会学的なケース研究をする場合には、次ぎのような問いをたてることを薦めています——「この研究中のケースの問題を発生させ、あるいは現象を発生させた社会的な要因は何であるか」「どのようにして、この問題や現象は、社会的に決定されているか」。研究者の社会学的な視点によって、研究の問いが形成され、さらに、研究の目的が設定されています。従って、社会学ケース研究には、研究者の主體的な態度が明確にされ、研究者の社会学上の研究方法や理論が明らかにされるべきです。

社会学的なケース研究をする研究者は、いろいろな材料を集めて、それらの材料を脱構築して、自己の研究目的に合わせ構築し直します。リアリティを再構築するプロセスで、研究者は社会学の言語を用いて分析をします。ある意味では、このように集められた生の言語材料が、より抽象性の高い社会学言語によって表現されるのが社会学ケース研究ともいえます。

d 評価研究としてのケース研究

調査研究での発見を一般法則化する必要性がない場合には、ケース評価研究方法が使えます。ケース評価研究には大きく六つの種類があります (Case Study Evaluations, 1990)。

描写的、探求的、危機的状況的、プログラムの実施、プログラム効果、累積的なケース研究です。描写的と探求的ケース研究は、ケース研究が持つ記述的という特色を生かした研究で、特定のプログラムや政策がどのように展開しているかを、深い意味合いのレベルで評価する研究が可能です。また、探求的な研究によって、フィールドに直結した仮説を提供することができます。

プログラムや、政策や、その他の策を実施する絶好の機会を知るためには、プログラムのどこに特定な問題があるかを知る必要があります。プログラムの実施による効果を評価するためには、通常の生活において、プログラムによる影響の原因、結果、を評価する研究が必要になります。累積的なケース研究の特色は、個々のケース研究を累積して、それぞれのケース研究で問われた質問に解答を出すことによって、種々のケース研究結果を統合するものです。

要約すると、評価研究をデザインする場合には、研究者は以下の四点を考慮する必要があります。

- ① どのケース、どのプログラム、どの単位を研究するかを選択。

- ② コンテキストや、プログラムを実施する場面や場所の設定。
- ③ 評価研究による結果の応用を裏付ける理論。
- ④ プログラム実施を成功させる明確なモデルの設計。

(四) ケース研究によってどのような知識を得られるか

ケース研究と統計処理による研究との主な違いは、ケース研究の方がより具体的で、より豊かな文脈があり、解釈を発展させる可能性がより大きいことです (Stake, 1995)。また、ケース研究は、研究の最終結果よりは研究のプロセスを大切にします、なぜなら、研究が進むに伴い、問題の焦点がだんだん明確になっていくからです。ケース研究の焦点は、研究対象となる人がどのような経験をしているか、その経験の意味合いは、どのようにその経験を解釈するのか、などに当てられます。研究者は、集団間の違いを発見しようとしているのではなく、また普遍的な事実を発見しようとしているのではないので、典型的なケースも、希少価値のあるケースも、研究対象となり得ます。

(七) どのようなリアリティや意味が解釈によって得られか

Stake (一九九五) はケース研究者を、科学者であるだけでなく、芸術家であり、技術者であると述べました。ケース研究者は、知識は発見されるものではなくて、構築されるものであると、一般的に、信じています。従って、ケース研究の目的は、特定のケースをより明確に記述して、さらに洗練された解釈を発展させることです。その際には、次の三つリアリティが存在することになります。

- ① 刺激に対しての単純な反応としての外在リアリティ
 - ② 単純な反応に対する解釈としての外在リアリティ
 - ③ 普遍的に統合された解釈、理知リアリティ
- ケース研究者の目的は、より明確にリアリティを構成すること (二番目のリアリティ) であり、さらに洗練されたリアリティの構成 (三番目のリアリティ) です。といっても、このようなリアリティは、研究者が解釈を加えることなしでは存在しないリアリティです。

新しい解釈を可能にする方法は、二つあります。ひとつは、直接解釈です。もうひとつは、事例の内容を類別したものを集大成することです。データを集める前は、研究者が抱いた概念フレームによって、研究の設問が設定され、どの要因を探求するか決定され、研究対象となるサンプルの選定がなされます。それに付け加えて、どのようにデータ収集をするかも概念フレームによって決定されます。研究者は、インタビュー、観察、文献の収集、研究者の研究対象にどのレベルで関係するのか、直接的に関わるのか、あるいは出来るだけ関係しないようにするのかは、設問の設定する際にすでに決定されています。データ収集をしている間にも、研究者は既存のデータを収集するだけでなく、新しいデータを集める方策を練ります。研究者は、直感や創造性を大切にして、人間理解に実際的な知識を増やすことを目標とします。

(イ) 研究者の役割によって知識の質に影響があるか

研究者には次の六つの役割があります。教師、擁護者、評価者、伝記作成者、理論家、解釈者です (Stake, 1995)。研究者は、研究の設問設定や概念フレームによって、どれかの役割、あるいは複数の役割を担うことにな

ります。

リアリティは、研究者の分析やデータの解釈によって形成されます。いわゆる分析されたりリアリティは、研究者と研究者の参加者との対話によって構成されるのです。このリアリティ構築のプロセスをAltheide・Johnson(一九九四)は、「分析されたりリアリティが想定するのは、コミュニケーション・プロセスによって実生活に意味と定義をもたらすことである」(p. 489)と述べています。コミュニケーション・プロセスによって、研究者は言葉で表現されていない知や、真実を探求します。ケース研究の対象は、具体的な行動によって表現されることと、その象徴する内容との中間に存在する現象を対象にすることが多く、言葉で表現するのが難しいことが多いのです。ところが、コミュニケーション・プロセスは、人間の意志と、行為の象徴性と結合させることができます。ここでの研究者の役割は、研究参加者の生の声を記述するに止まらず、実生活における行為や言語活動が暗黙に意味することを把握する役割も担うのです。

次に、研究者は、研究対象となる参加者と、どの程度、どのレベルでかかわるかということが問われます。研究者は、研究対象に影響を与えることは避けられません。そこで、研究者は、どの程度、ケースと関わるかを明確に定める必要があります。Stake(一九九五)は、以下の7種類の設問に答えることが倫理上の配慮して必要と考えています。

- a ケースの活動にどの程度参加するか。
- b ケースに自分の専門性をどの程度知らせるか、ケースをどの程度理解しているかを知らせるか。
- c 中立的な観察者か、評価者か、あるいは、批評的な分析者か。
- d 読者の予測される期待にどの程度応えるか。
- e ケースについての解釈をどの程度提供するか。
- f どの程度、ケースの立場を擁護するか。
- g ケースを「物語(story)」として表現するかどうか。

研究者が倫理的な配慮を忘れない限り、研究者は自己の役割を道具として使うことができます。ただし、倫理的な信頼を確保するためには、研究者は、上の質問に解答を得る必要があることとなります。従って、ケース記述をする際には、研究者がどのようにコンテキストや背景と関係し、どのような方法を採用したかを明確に記述することが倫理上求められます。

(ウ) ケース研究の読者の役割

ケース研究者は、読者がどのように研究結果を読み、どのような結論に達するか、研究結果を一般法則化して、どのように他のケースに応用するか、を配慮する必要があります。

読者の経験と、ケース研究を読んで学んだ知識が混合して、自然に一般化(generalization)された法則になっていきます。この自然に一般化された知と、解釈された一般法則(あるいは仮説)として提案された一般法則とは異なります。Stake(一九九五)は、自然な一般法則化を次のように説明しています。「個人の生活経験から出された結論、あるいは、他者の気持ちになって経験したことが、あまりにも巧みに構築されていたので、まるで自分自身に起きたかのような経験を通して結論を得ること」(p. 85)。

研究者は、解釈を加える前に、「生のデータ」を提供し、研究方法を明らかにして、理論的な立場や研究者の特色を記述し、さらに別の視点からの発見も付け加えて、読者が自然な一般法則という知を得るように援助するべきです。

(六) ケース研究の妥当性と信頼性

ケース研究の目的は、統計によって一般法則を得るのではなくて、具体的な世界の知識、作業仮説や自然な一般知識を得ることにあります。ケース研究は、自然で、ホリスティックな、民族的な、現象としての知を創造することができますが、二つの内在する弱みを持っています。それは、妥当性、特に外的妥当性(external validity)に欠けることです。つまり、単一のケース研究で得られた知識を他のケースに当てはめることが不可能なことです。なぜなら、選択されたケースが代表的な典型とは限らないからです。もう一つの弱さは、データ収集する方法や分析の方法に、精密さが欠けることです。

次の問い「ケース研究の利点を生かして、ケースで得られた知識をどのように主張できるか」を考えてみましょう。

(ア) 内的妥当性

第一に、研究者は、ケース研究とは何かを定義する必要があります。例えば、理論や仮説提示を目的とする場合には、ケース研究の方法は、探究的なものになります。もし、ケースの深い意味合いを記述することが目的ならば、説明や描写を主体とするケース研究になります。評価が目的ならば、評価的なケース研究になります。

次は、設問設定をして、何を基準にしてケース研究するかを確立します。最初の内的な妥当性をテストとして、観察する目的が問われます。

次のステップは、研究者がケースと、そのケースが活動する場所を選定することです。妥当性を高める方法の一つとしては、典型的なケースを研究することです(Schofield, 1990)。時には、極端な例や、稀な例を、典型的な例と対照させるために使われることがあります。サンプリングの技術は、意図的な方法が採用されます。さらに妥当性を高めるためには、複数の場所からサンプルを選ぶことが薦められます。また、どの程度の期間、観察するかを決める必要があります。例えば、ライフ・サイクルを考慮すべきか、どの程度の期間、観察すればデータとして十分なのかを決める必要があります。

ケース研究の強みは、第一に、読者がまるで研究者の目で現象を観察できることです。そこで、研究者は、観察する際に、基準としていた仮定や理論(世界観、理論的傾向も含む)を読者に伝える必要があります。読者は、この情報を得れば、ケース研究分析が妥当で、信頼できるか、を決定することができます。

第2の強みは、ケースへの距離です。研究者は、ケースやその場所に近づくことは容易ですが、読者にとってはそのケースの情報もないし、地理的な条件や、その他の文化的な条件などで、近寄ることも難しい場合が多いです。読者はケースについてより詳しい情報を求めます。

第3の強みは、ケース研究は、まるで実際に体験するかのような疑似体験を、読者に提供できることです。新鮮で、具体的なケース記述があると、記憶するのも、理解するのも容易にできます。このような新鮮で具体的な記述があると、読者の記述に対する防衛的な態度は和らぎ、ケース理解が深まると考えられます。

その他、内的な妥当性を高めるためには次の方策があります。

- a 三角地点から研究を進める。研究者は複数の観点からデータを収集すること。特に、三角地点（観察、過去の文献、インタビューなどの生データ）から得られた情報を統合し、お互いの視点からの情報をチェックすること。
- b 研究参加者から情報をチェックしてもらう。情報提供者からフィードバックを得ることはデータの信憑性を高めます。そこで、ケース研究の結果が信じられるものであるかどうかを情報提供者に確認してもらい、分析や解釈の信頼性を高めることができます。
- c 適切な期間の観察（長すぎたり、短すぎたりしない）、データを継続的に、反復して収集すること。ある現象を繰り返し、連続して観察する妥当性が高まります。
- d 研究チームの仲間によるチェック。同じデータ収集の方法に従い実施された複数の研究者によって収集された生のデータを分析し、その分析がどれも同じような結果になった場合は、妥当性が高いといえます。
- e 参加モードの研究。この研究方法は、研究対象となる参加者に、あるゆる研究段階に参加することを可能にします。研究の概念化、データの収集、分析、発見されたことの記述、これらすべての段階に参加者を研究に参入させることができます。

内的な妥当性の高い研究にするために、ケース研究の強みを生かして、上記の方策を複数応用することが求められます。

(4) 信頼性

信頼性を高めるためには、どの研究者であっても、同じ研究手続きを経たならば、同じ結果が得られるようにする必要があります。しかし、信頼性はケース研究にとっては、やっかいな問題となります。というのは、研究者その人が、主な道具となりデータを収集し、リアリティを構築するからです。研究者は研究対象の内部にもなるし、外部から研究することもできるので、立場が明確でないと信頼性を失います。

プロトコルが注意深く作成され、データ基盤が十分に出来上がっていると、データの収集に関して一貫性があることを証明できます。言い換えれば、研究者は、柔軟性を失うことなく、予期せぬ出来事にも対応できるという条件を満たせば、一貫性のある立場をとる必要があります。一貫性があることを証明する目的は、研究者は研究を始める前から偏見を持っていないことを証明するためです。ケース研究のプロトコルには、データ収集のための用具、手続き、用具を使う際の一般的なルールが含まれます。

(5) 外的妥当性

外的妥当性とは、発見された知識をどの程度一般法則化できるかを意味します。ケース研究の目標は、Scholfield（一九九〇）によると、「注意深い研究者が、同じ状況で、あるいは同じ研究をした場合に、同じような標準的な結果を得ることではなくて、その状況での詳細な研究と一致するところの首尾一貫した明解な記述と明解な状況視点を得ることだ」（p.203）とされています。つまり、ケース研究に外的妥当性があるとは、標準化された結果を得たことよりも、理論的な説得力があることを意味します。

特に、ケースが一つの場合には、一般法則化が問題にされます。単一ケースの場合には、そのケースに関して深い理解を得ることはできませんが、結果を一般法則化することはできません。複数のケース研究の場合に、高い外的妥当性を求めるならば、ケースを選ぶ状況が大切になります。代表的なサンプルを選ぶためには、次の方法があります (Miles・Huberman, 1984)。

- ① ケースの数を増やす
- ② 対照的なケースを意図的に選ぶ (極端なケース、稀なケース、反するケースなど)
- ③ ケースを系統的に選別する
- ④ ランダムサンプリングをする

ケース研究の主要な目的は、ケースの持つ特色を表出することですから、ケース同士を対照したり、ケース間のパターンを記述したりします。従って、ケースの数を増やすことよりも、代表的なケースを選ぶことの方が重要になります。研究者は、研究対象とされるケースからランダムサンプリングしてケースを選ぶよりは、基準に適合するケースを選ぶ方がよいでしょう。

次に問題となるのは、外的妥当性を高めるデータ分析方法です。分析の内容ではなくて、データ分析の方策が妥当性を決定します。もし適切なデータ分析方策を基礎にして分析されたならば、因果関係を証明することも可能です (Yin, 1984)。

そのような方策の一つは、理論上の仮説を提示することです。その際に、研究者は、データを研究目的に即してチェックする必要があります。つまり、研究質問が研究の案内役となるのです。もう一つの方策は、ケース記述を十分にすることです。ケースの詳細で生き生きとした描写によって生のデータに秩序が生まれます。

それに付け加えて、外的妥当性は二つの軸でテストすることができます。一つの軸は、ネストド・コンテキスト (nested context) と呼ばれる、個人、教室・集団、学校、家族、コミュニティなどの生活のいわば巢を形成しているコンテキスト、もう一つの軸は、人生の発達に伴う変化 (家族生活、言語、社会経済地位、文化規範、希望、学習適応、宗教などの変化) があります。研究者は、さまざまな解釈を比較して、対照させて、パターンを発見します。どのパターンが適合するかを模索する方策を採用した場合には、研究者はその他に可能なパターンや説明の仕方がないか注意する必要があります。

外的妥当性を高めるためには、時の経過に伴い人生変化が顕著な場合には、タイム・シリーズ (time series analysis) といって、時間の経過に従い、数回、データを収集して分析し比較する方策も有効です。例として、学生の成績や行動のデータを各学期毎に収集し分析し、比較すれば、タイム・シリーズ分析になります。

結論

ケース研究とは何かと説明することは、ケース研究の定義が複数にあるので、難しいことです。Campbell (一九七九) が、単一のケース研究についての自由度を論じ、自由度を増し信頼性を高めるためには、観察者の文化によって影響されるのを避けるために三角地点からデータを収集することを示唆しました。このことは、複数の観察者によって、複数の地点でのデータ収集を意味しています。

ケースの選定は、数の多さではなくて、やはりどの現象を、より代表的に体现しているかです。ケース研究の真髄は、報告書という限られた表現の中で、複雑な意味をカプセル化することです (Stake, 1994)。その意味で

は、単一のケース研究でも十分に深い内容を把握することは可能です。その際には、すでに述べたように妥当性や信頼性を高める努力が必要になります。

本論の文頭で、カウンセリングの人間モデルは、人間を主体性のある存在とみなす傾向があると述べました。複数のリアリティに存在する人間、その認知、情動、行為は、一人のホリスティックな人間に統合されます。しかし、現実には、カウンセリング理論はリアリティを導き、人間が起こす現象を直線的なものや分断されたものとして表します。これは、いわば単純化のし過ぎです。理論は、一種のリアリティの近似値を提供しますが、それは、複数リアリティに存在する人間探求の知とはなり得ません。

筆者が、本稿の結論で述べたいことは、人間生活のコンテキストを深い意味合いで理解して、複数のリアリティを見る視点を身につけ、カウンセリングの複数パラダイムを自由に出入りして、ホリスティックに人間を観察し理解する、そのような知がカウンセリングの知であるということことです。

複数リアリティや豊かなコンテキストを失うことのない知を求める、一つの手段がケース研究です。しかし、ケース研究の手法にも、学問としての取り決めを無視することはできません。妥当性や信頼性を高める努力は、学問である以上必要なことです。

References

- Altheide, D. L., & Johnson, J. M. (1994). In N. K. Denzin & Y. S. Lincoln (Eds.), *Handbook of qualitative research* (pp. 485-499). CA: Sage Publications, Inc.
- Bandura, A. (1991). Human agency: The rhetoric and the reality. *American Psychologist*, 46, 157-162.
- Borgen, F. H. (1992). Expanding scientific paradigms in counseling psychology. In Brown, S. D., & Lent R. W. (eds.), *Handbook of counseling psychology* (2nd ed.) (pp. 111-139). New York: John Wiley & Sons, Inc.
- Campbell, D. T. (1975). "Degree of freedom" and the case study. *Comparative Political Studies*, 8, 178-193.
- Hamel, J. (1993). *Case study methods*. CA: Sage Publications, Inc.
- Hoshmand, L. L. S. T. (1989). The alternate research paradigms: A review and teaching proposal. *Counseling Psychologist*, 17, 3-79.
- Kelly, E. W. Jr. (1994). *Relationships-centered consulting: An integration of art and science*. New York: Springer Publishing Company.
- Kuhn, T. S. (1970). *The structure of scientific revolutions* (2nd. Ed.). Chicago: The University of Chicago Press.
- LeCompte, M. D., & Preissle, J. (1993). *Ethnography and qualitative design in education research* (2nd ed.). CA: Academic Press, Inc.
- Mahoney, M. J., & Patterson, K. M. (1992). Changing theory of change: Recent developments in counseling psychology. In Brown, S. D., & Lent R. W. (eds.), *Handbook of counseling psychology* (2nd ed.) (pp. 665-689). New York: John Wiley & Sons, Inc.
- Merriam, S. B. (1988). *Case study research in education: A qualitative approach*. CA: Jossey-Bass Inc., Publishers.
- Miles, M. B., & Huberman, A. M. (1984). Drawing valid meaning from qualitative data: Toward a shared craft. *Educational Researcher*, 13, 20-30.
- Runyan, W. M. (1982). In defense of the case study method. *American Journal of Orthopsychiatry*, 52, 440-446.
- Shofield, J. W. (1990). Increasing the generalizability of qualitative research. In E. W. Eisner, & A. Peshkin (Eds.), *Qualitative inquiry in education: The continuing debate* (pp. 201-232). New York: Teachers College Press.

- Silverman, D. (1993). *Interpreting qualitative data: Methods for analyzing talk, text and interaction*. Ca: Sage Publications, Inc.
- Stake, R. E. (1995). *The art of case study research*. CA: Sage Publications, Inc.
- U.S. General Accounting Office (1990). *Case study evaluations*. MD: U.S. General Accounting Office.
- Yin, R. K. (1992). The case study method as a tool for doing evaluation. *Current Sociology*, 40, 121-137.
- Yin, R. K. (1994). *Case study research: Design and methods (2nd ed.)*. CA: Sage Publications, Inc.